

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02119

研究課題名（和文）在日コリアンのポスト・アイデンティティ政治と文化表現

研究課題名（英文）Post-Identity and Cultural Politics of Zainichi Koreans

研究代表者

川端 浩平（Kawabata, Kohei）

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：80563965

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1970年代に在日コリアンのアイデンティティ政治の拠点となった在日大韓基督教川崎教会を中心とした社会運動の成果がその後の世代によっていかに継承されているのかを明らかにした。具体的には、1990年代後半に川崎教会に集った若者たちとヒップホップ文化を通じた反差別の実践を明らかにした。在日コリアン2.5世のラッパーである郭正勲（FUNI）を中心として在日コリアン、ニューカマーの第二世代、日本人の若者たちは、ラップ音楽のワークショップや様々なイベントを通じて反差別のメッセージを発信している状況が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究が取り組んだ、排外主義の時代を生きる在日コリアンを中心とした多様なルーツを持つ当事者たちが、ヒップホップやポピュラー文化と自らを取り巻く差別、貧困、環境問題などをめぐる問題と結びつけながら、いかに対抗的なポスト・アイデンティティ政治を展開しているのかについて質的研究によって明らかにした。この事例研究は、私たちの日常的な営みやそこから生まれる文化を用いることにより、排外主義的な風潮やコミュニケーション様式が広がる現代日本社会における諸問題を克服するための反人種差別の実践の方法や可能性を模索したものである。

研究成果の概要（英文）：This study clarifies how identity politics among Zainichi Koreans during the 1970s, based on the Zainichi Korean Church in Kawasaki, are inherited by the following generation. In particular, it focuses on hip-hop cultures and anti-racism practices among youth members gathered in the church in the late 1990s. Young Zainichi Koreans, led by 2.5 generation Zainichi Korean Jeong-Hoon Kwak (FUNI), the second generation of newcomer migrants, and Japanese youth, are now delivering messages of anti-discrimination by practicing rap workshops and various other events.

研究分野：社会学

キーワード：差別と排除 在日コリアン ポストアイデンティティ政治 ラップ音楽 キリスト教

1. 研究開始当初の背景

本研究において考察する、川崎市桜本地区の在日コリアンを中心としたコミュニティを核としつつも多様なルーツを持った若者たちは、教育的実践や交流を通じて混淆化したアイデンティティを育むとともに、文化表現を通じてポスト・アイデンティティ政治を展開していた。すなわち、脱工業化と高度情報化社会化が生み出しているグローバルに展開する排外主義やヘイトスピーチに向き合う中で育った若い世代は、この時代が生み出した差別に対抗するかたちで自らのアイデンティティを形成している。このような新しい潮流を確認することができる一つの文化表現が、脱工業化時代にアメリカのインナーシティにおいて中南米からの移民やアフリカ系アメリカ人によって生み出されたラップ音楽である。ラップ音楽は、貧困や差別の中で育った持たざる者たちの文化表現であり、民族的マイノリティによる人種問題をめぐる批判的な視点がリリックやディスというコミュニケーション技法を通じて表現されている。それらの批評性を伴った文化表現は「他者」との共感をベースとしたものであり、匿名性の高い排外主義的コミュニケーションに抗するものとして成立している。このようなストリート文化を通じたポスト・アイデンティティ政治の展開とネットワークの形成を参与観察や聞き取り調査といった質的なアプローチによって明らかにすることには大きな意義があると考えた。

そこで本研究では、川崎市桜本地区を拠点として活動する在日コリアンや多様なルーツを持つ若い世代に対して参与観察および聞き取り調査を実施し、彼/彼女らの文化表現に見られる排外主義に抗するアイデンティティ形成を明らかにすることを試みた。具体的には、差別と貧困といったテーマに向き合わざるを得ない川崎での日常生活において、いかにラップ音楽という文化表現を通じて自らの生きる状況や「他者」との共生のあり方を言語化し、多様かつ混淆的なアイデンティティを取り戻しているのかに焦点を当てた。なぜならば、路上やインターネットで展開する排外主義を通じてターゲットとされる人びとはその生存を脅かされているだけでなく、自分たちについて語る言葉や想像力をも奪われるような状況に置かれているからである。このような分析視角を担保することによって、現代社会において展開する嫌悪に満ちたヘイト行為や言説に抗するような実践のあり方を明らかにするとともに、多文化化する地域社会における共生のあり方を提示することが可能となると考えた。

2. 研究の目的

本研究が取り組んだ、排外主義の時代を生きる在日コリアンを中心とした多様なルーツを持つ当事者たちが、自らを取り巻く差別、貧困、環境問題などをめぐる問題と結びつけながら、いかなる対抗的なポスト・アイデンティティ政治を展開しているのかについての質的研究は、排外主義的な風潮やコミュニケーション様式が広がる現代日本社会において克服されるべき重要な課題であるにもかかわらず、きわめて少なく、本研究はその最初の試みであった。その背景としては、(1)再開発とジェントリフィケーションが進展する工業都市において継続して存在する貧困や環境汚染といった問題が、多様なルーツを持つ若い世代に対する差別やエスニシティをめぐる問題とは切り離されている現実がある。(2)排外主義の矛先が均質な集団としての在日コリアンに向けられるのに対して、非集住化とともに日本人やニューカマーの外国人住民との通婚が進み混淆化している状況が不可視化されているといえる。(3)本来は多数派である日本人やニューカマーの外国人住民とのあいだに生まれた在日コリアンに関する研究は、いわゆる集住地域や特定の民族組織との関わり合いが希薄なために不可視な存在となってしまうことが多い。ただし、川崎ふれあい館では1970年代よりそのような状況に対応する教育的実践が継続されており、日本社会の多文化的な状況を理解するために不可欠である。(4)文化表現を通じたアイデンティティ形成という視点は、脱工業化と高度情報化社会といった条件のもとグローバルな排外主義に対抗する新しい実践を理解するうえで欠かせない。とりわけ、ラップ音楽のリリックやディスといったコミュニケーションのモードは、排外主義に抗するツールとなっているとともに、本質的なエスニシティに囚われない「他者」との共感をベースにしたアイデンティティ形成のあり方を示している。(5)在日コリアンや複数のルーツを持つ若い世代のアイデンティティをエスニシティに集約して考察するのではなく、階層や環境問題との「交錯性」を考察するような視点を踏まえた研究はきわめて少なかった。このことは、アイデンティティの政治と結びついてきた集住地域における調査とエスニシティの社会分析の理論的枠組みと調査方法を再構築する必要性を示唆している。

3. 研究の方法

本研究においては、川崎市桜本地区の在日コリアンを中心とした多文化的な背景を持つ若い世代のラップ音楽や教育的実践に関わる人びとの営みを、参与観察および聞き取り調査を実施し、ラップの表現や混淆的なアイデンティティを育むような教育的実践を通じた排外主義に対抗的なポスト・アイデンティティ政治の展開を明らかにした。その際、彼/彼女らの対抗的な実践が排外主義といった人種差別に向けられるだけでなく、貧困や環境問題といった社会問題への批判的意識を形成していることを明らかにした。一連の調査の実施と分析により、具体的に以

下の点が明らかとなった。

(1) ラップ音楽と教育的実践を通じて形成される対抗的アイデンティティ

参与観察と聞き取り調査によって、当事者たちによるラップ音楽や教育的実践を通じたネットワークの形成を明らかにするとともに、インターネットや当該地域に対する排外主義やヘイトスピーチに対抗して生み出される言語的表現やポスト・アイデンティティ政治の実践を明らかにした。

(2) 在日コリアンのアイデンティティの変容と混淆化

参与観察と聞き取り調査によって、非集住化と国際結婚等を通じた混淆化が進展する在日コリアンのアイデンティティの変容を明らかにした。オールドカマー/ニューカマーという二項対立的なホスト社会の認識を越境する日常的実践の領域を考察し、国籍の選択やエスニシティをめぐる認識の変容に焦点を当てることにより、アイデンティティの混淆化の実態を明らかにした。

(3) 「交錯性」を伴った対抗的アイデンティティの形成

当事者たちが、アイデンティティをめぐる問題をエスニシティにのみ回収して形成するのではなく、自らの生活環境を取り巻く階層や環境問題といった他の要素や同じ状況を生きる「他者」との「交錯性」を結びつけることによって対抗的なアイデンティティを形成していることを明らかにした。

(4) 地域社会における多文化共生のとりくみに関する考察

上述した三つの研究成果を地域社会における多文化共生のとりくみにおける課題と関連づけることにより実践的な問題として考察した。とりわけ地域社会の行政・市民による多文化共生のとりくみが、グローバリゼーションに伴って進展する脱工業化といった構造的な変化や不正義という文脈からは切り離されていることともに、ホスト社会そのものの文化的変容という認識が欠如していることの弊害に関する考察を深めた。

4. 研究成果

研究に着手した2020年度からCovid-19のパンデミック状況のなかで研究調査を進めることになった。特に最初の2年間はフィールドに赴き参与観察やインタビュー調査が困難であった。そのような状況下で、ZOOMやソーシャルメディアを用いることによりインタビュー調査を実施し、当該研究の成果を発信することができた。もう一方でこの間には、Covid-19が収束に向かう中で、在日コリアンのラッパー郭正勲と写真家の中村智道とのコラボレーションを通じてラップワークショップを実施するとともに、写真撮影を行い、その成果を研究へと結びつけるアート・ベース・リサーチの手法を用いた。また、2022年度からは川崎のキリスト教会を中心としたコミュニティとの関係性を深め、この研究調査を今後継続して発展させていくための新たなテーマとなる宗教とエスニシティを通じた反人種差別の実践のあり方に関する知見を得た。これらの研究成果は、学術論文、学会発表、書籍、その他のシンポジウムやオンラインイベントの配信を通じて社会に発信することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川端浩平	4. 巻 第43号
2. 論文標題 人種差別に抵抗する<力>の所在と循環－在日コリアン男性アスリートをめぐる表象	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代スポーツ評論	6. 最初と最後の頁 98-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川端浩平	4. 巻 第23号
2. 論文標題 在日コリアンと文化的実践－川崎の在日コリアン・ラッパーから考える	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 フォーラム現代社会学	6. 最初と最後の頁 56-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川端浩平
2. 発表標題 在日コリアンと文化的実践－川崎の在日コリアン・ラッパーから考える
3. 学会等名 関西社会学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川端浩平
2. 発表標題 多文化的実践と放射能汚染－福島朝鮮学校コミュニティのフィールドワークから
3. 学会等名 オーストラリア学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川端浩平
2. 発表標題 現代を徘徊するターナーの奴隷船－レイシャルキャピタリズム、あるいは'Back' Lives Matterをめぐって
3. 学会等名 カルチュラルスタディーズ学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川端浩平
2. 発表標題 路上の技芸と逸脱の変容－在日コリアン・ラッパーの世界観から
3. 学会等名 日本犯罪社会学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川端浩平
2. 発表標題 消される言葉、想起する表現－関東大震災100年後の東京で
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会（招待講演）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 ガッサン・ハージ、塩原良和、川端浩平、前川真裕子、稲津秀樹、高橋進之介	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 432
3. 書名 オルター・ポリティクス	

1. 著者名 川端浩平（岸政彦編著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 530
3. 書名 生活史論集	

1. 著者名 川端浩平（林 香里、田中東子編著）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 264
3. 書名 ジェンダーで学ぶメディア論	

1. 著者名 川端浩平	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 排外主義と在日コリアン	

1. 著者名 川端浩平（方法論懇話会編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 336
3. 書名 療法としての歴史<知>-いまを診る	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------